

第五回

「伊豆下田が誇る世界的スパで、
たっぷりリゾートライフを満喫！」
清流荘



「ビーチ・リゾート下田にある高級温泉旅館」

伊豆下田は、幕末の黒船による開国や、唐人お吉、あるいは海水浴場として知られる。ところが欧米系の人たちは、下田はビーチ・リゾートだと言う。たしかに透き通った海の美しさは、世界レベルで、そのせいか伊豆急線利用客の欧米系外国人の90%近い人たちが、伊豆急下田駅で下車する統計結果も出ている。実は筆者も、下田の噂を聞いたのは、北インドのダラムサラという高原リゾートで、フランス人からだった。そんな下田の蓮台寺温泉の入口に位置するのが、老舗の高級温泉旅館『清流荘』である。ここには、和風でシックな佇まいからは想像できない世界が広がっていた。

「リゾートとは何かを、ロビーで感じる」

清流荘の玄関先には、高級旅館らしく、巨大な石灯籠が置かれ、日本庭園「竹庭」が配されている。建屋に入ると、階段の先がロビー「汀（みぎわ）」だ。暗めの明かりが落ち着きを醸し出す。大きな窓からは、緑の山と、手前に稻生沢川。川のせせらぎが聴こえ、いきなり森の中に迷い込んだような錯覚に陥る。まるで別世界だ。つい先ほどまで住宅街を車で走っていたのに……。下田には、ビーチ・リゾートだけでなく、森のリゾートもあったのだ。汀は、そんなリゾート清流荘へのアプローチ。そこにあったのは、広々とした空間性と、たっぷりの酸素、緑豊かな自然と静寂である。



「滞在時間は、なんと21時間！」

この宿のチェックインは午後2時、チェックアウトは午前11時。これなら併設のスパ施設でたっぷり過ごせる。館内地図を見ると、屋外温泉プール「ガーデンSPA」を中心に、四種のサウナがある古代ローマ式浴場「テルマリウム」、「ケロ」は山小屋風薪サウナ、和風の露天風呂「朱鷺（とき）の湯」があり、周囲に各部屋が、まるでコテージのように連なっている。さっそく、水着に着替えてケロへ行く。なんでもフィンランドから材料と職人を呼び寄せ造り、伊豆の木材を薪にしている。サウナ内には、薪のにおいが充満し、汗がほとばしり出た。息苦しくならないのが特徴で、十数年前にフィンランドで入ったサウナと同じ本格ぶりには、びっくりである。

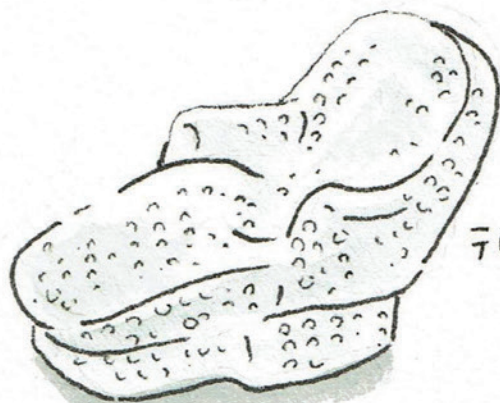
ガーデンスパの水温は30℃前後だそうで、22時までの営業、しかも真冬でも泳げる。一時間しっかり泳いだ。

背泳ぎであたりを見回すと、背の高いヤシの木が生え、山が見える。下田のビーチは、バリ島で言えばクタカレギヤンだが、こちらは山の聖地ウブドウの雰囲気である。

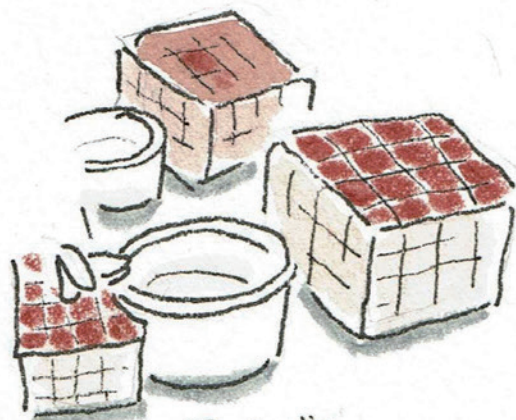
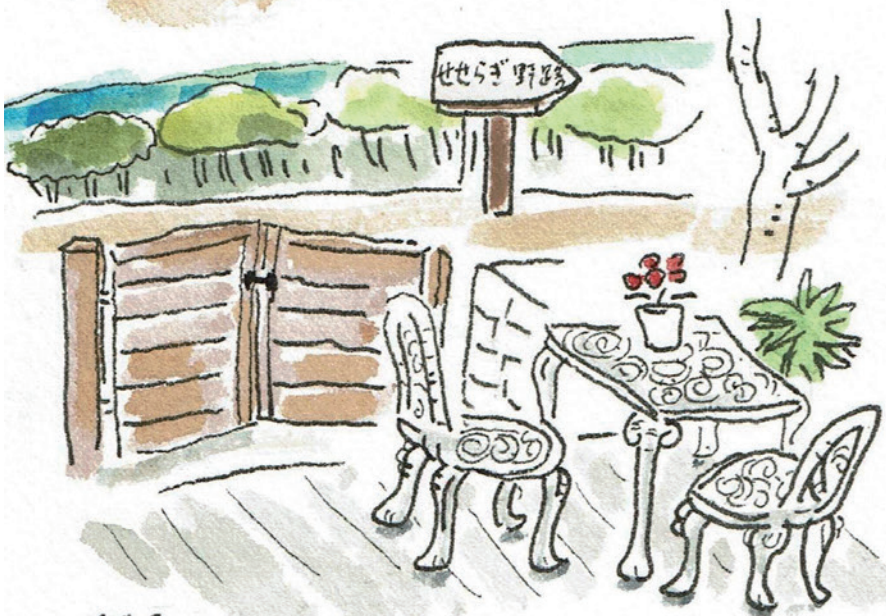
泳いだ後は、テルマリウムへ。アロマのにおいが心地いい内部には、足湯やミストサウナなど。モザイク模様のタイル貼りが美しい。まるで時空を超えて、イタリアのポンペイ遺跡に飛び込んだよう。しかもオーストリア製と本格派だ。そして和風の露天風呂で汗を流して、マッサージュすると、もう夕飯である。

KELO-SAUNA

サウナ

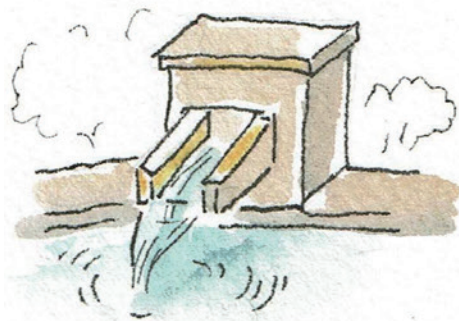


テビダリウム



フットバス

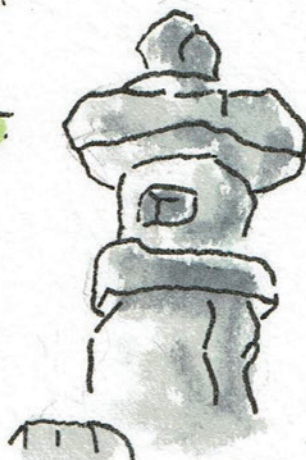
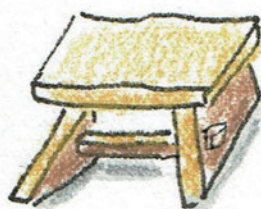
テラス



かきあじさい



スリッパ



大 lantern

「高級旅館ならではの料理と部屋食で

さらにリラックス！」

夕食は、ダイニングルーム「醍醐」あるいは部屋食である。この日は部屋に用意していただいた。二人で泊まるには広い部屋「柿田」だったが、三世代の家族が集まれば、まるで我が家に居ながらにリラックスして過ごせるにちがいない。小さな子供がいると、こうした和風旅館は意外に使い勝手がいいものだ。あるいは気の合う仲間数人と一緒に部屋に泊まってもいい。最近そんな宿泊形態も流行つていると言う。食事はもう、文句なし。伊豆名産の素材を使った料理の数々は、あつさり味で、新鮮そのもの。和食好きには、やはり高級旅館という選択肢は外せない。



「世界に通じる本物志向のスパ

リゾート型高級温泉旅館」

翌朝は、まず部屋の露天風呂を浴びてから朝食、「せせらぎ野路」をゆっくり散策し、テルマリウムへ。ガーデンスパで軽く泳いで、露天風呂で仕上げの後、マッサージ椅子で体をほぐせば、もう十一時近かった。宿のコンセプトは「同音同響」。今回は妻と二人で、サウナで、プールで、同じ空気を吸い、同じにおいを嗅ぎ、せせらぎの音を聴く。帰ってから話題は尽きない。それにしてもこの旅館、リゾート型高級温泉旅館と呼ぶにふさわしく、外国人客がジワリ増えていると言う。きっとここには、本物のリゾートがあるからだ。世界に通じるスパ施設を、ぜひご堪能あれ。